

『歌合集成 平安編』正誤表

頁	略称	段	行	誤りと訂正	訂正後の本文
49	5 寛平中 I	上	15	末尾に「f」を追加	一人を思心は我にあらねはや 身のまとふたに しられさるらん」f
49	5 寛平中 II	中	10	末尾に丁付の「」を追加	春霞たつひの風のいとなれや 滝のをとけて 玉とみたる、
72	14 亭子合 III	下	後3	3句目「(す)」を、カツコを外し直前「み」の傍記とする	たましくしけふたかみやまのほと、きみいま そあけくれなきわたるなる
73	14 亭子合 III	上	7~8	五番歌末尾の「a」を次行「右」の下に移動し、五番歌の次の一行アキも「右」の次の行に移動。	わかみをありとやはおもふ 右」a
73	14 亭子合 III	上	12	二句目「ふ」の右に「ふ」と傍記	右 七春さめのよにふるそらもおもほえず□□あな からにひとこふる身は
134	39 天徳合 III	下	後2	末尾に丁付の「二五」を追加	三「人」つてにしらせてしかなかくれぬの み こもりにのみ恋やわたらん」三
135	39 天徳合 III	上	12	末尾に丁付の「」を追加	三三こひしさをな「に」、つけてかなくさめん 夢たにみえすぬるよなければ」
136	39 天徳合 III	上	6	末尾に丁付の「二九」を追加	四ことのはをくらふの山のおほつかな ふかき 心のいつれまされる」元
173	53 謎合 III	下	4	末尾に丁付の「二」を追加	八とにかくにいまさらくにははしみつ はや さためてき右はまさると」三
278	115 祐子内	上	1	「祐子内親王家歌合 康平三1060年四月二十六日庚申か」を「祐子内親王家歌合 年次未詳」とする	祐子内親王家歌合 年次未詳 〔115 祐子内〕

355	345	345	344	344	344	340	340	337
162 仲実合	160 東塔合	160 東塔合	160 東塔合	160 東塔合	160 東塔合	157 中宮合	157 中宮合	155 権大合
中	中	上	下	中	上	中	上	下
後2	後3の前	後9	2	16	後9~8	2	5	5
末尾に丁付の「」を追加	二三番歌の前に詞書「右」を追加	「右左」の「右」の左側に「と」（ミセケチ記号）を追加	「これは」の下の「・」を右側の傍記に	「おほつかなしよめるは」の「よ」の右傍記「と」を直前の「し」と「よ」の間に移動	「よなれはとはへる」の「れ」の傍記「と」とはへ」の傍記「○」の位置をそれぞれ「と」はへ」の字間に移動	「昌」の字は慣用のため「昌蒲」の右の（ママ）を削除	「昌」の字は慣用のため「昌蒲」の右の（ママ）を削除	「紅葉」の左の（ママ）を「郎」の左に移動
「〇手もたゆく我しめゆひし撫子の 花には露もよきてをかなむ」	「三よもすからたきあかしつるにはひをはかみもあはれとてらさゝらめや」	「たのはらにけふもくらしつ （右朱線開み） 右左歌、心はさもとときこゆれとも、まくらもしに、せすとよみ、こしのいつもし 右	「かにいはむや、なく一声とよむこちのすれは、なをこれはまはへへきにはやはへらむ」	「左歌に、おほつかなしよめるは、いかにへることにか、ともしはさつきやみに わりなしあくるしの、め 二三かつらきのかみならなくともしする 人も	「ろきにやはへらむ 左 右歌に、まつひとのくへきよなれはとはへるは、さ、かにのふるまひなどのしはへりけるにや、おほよそすへもふる ●「○」削除	「三番 昌蒲 左 の「三番」との間に小字で訂正する） 歌人 郭公 昌蒲 早苗 恋 祝 右 左	「中宮権大夫家歌合 嘉保三年五月三日 題 郭公 昌蒲 早苗 恋 祝 歌人 郭公 昌蒲 早苗 恋 祝 右 左	「権大納言家歌合 嘉保三年三月廿二日 題 霞 鶯 桜 郭公 五月雨 月 （女郎）紅葉 雪 千鳥 祝 恋

786	763	682	668	667	660	660	634	583	583	508
185 永縁合解	160 東塔合解	48 堀河合解	26 醍醐合解	26 醍醐合解	14 亭子合解	14 亭子合解	211 御裳濯	205 別雷合 I	205 別雷合 I	197 経盛合
上	上	上	上	下	下	上	中	上	上	中
6	8	後10~9	2	後7	後8	後11	5	後8~7	5	10
「永縁奈良房歌合」の「縁」を「縁」とする（上部柱も修正）	「不備がある字のか」の「字」を削除	傍記の重なりを調整	「萩谷氏は」を「その後、萩谷氏は」とする	「もとに」を「もとに、」とする	「ちなみに、aは柏木切として」の「ちなみに、」を削除する	「ちなみに」を「なお」とする	末尾に丁付の「八」を追加	詞書の位置を歌の2字下げとする	詞書の位置を歌の2字下げとする	末尾に丁付の「」を追加
永縁奈良房歌合 天治元（1131）年春 〔185 永縁合解〕	簡所の右に同じ本文を書き、まだ不備があるのか、その右にさらに同じ本 一五番歌の第二・三句「よ風さむしむへしこそ」などのように、訂正する	和歌合抄目録反古卷八には堀河中納言家歌合 <small>藤兼通号後堀河殿忠義公</small> 、二十卷本卷十三目録には堀河中納言家歌合 <small>天延三年二月十四日</small> とあり、いずれも堀河中 <small>有仮名日記</small>	多・醍醐・村上朝を中心として『平安朝律令社会の文学』ぺりかん社 一九九三所収、初出一九七二。その後、萩谷氏は『歌合大成』新訂増補「一」	の「一は藏人である。その開催時期について、萩谷朴氏は人物考証をもとに、是茂・邦基・兼輔・兼茂・伊望・伊衡・実頼・元方・庶明九名の上下臆の	らず、当該断簡の原形が歌合記録の一資料として作成された可能性をうかがわせる。aは柏木切として「文化遺産オンライン」（文化庁）・「九州国立	二首・その他一首ずつで、躬恒の歌が最多である。なお、一一・三八番歌は従来、法皇の作と考えられてきたが、久保木哲夫氏は醍醐天皇の作であ	七よし野山こそそのしほりのみちかへて また見ぬかたの花をたつねむ <small>八</small>	右 從四位下行右近衛権少将兼参河守藤原朝臣顕家	左 正三位行太皇太后宮権大夫平朝臣経盛	八七紅葉は、紅ふかく成ゆけと 独さめたる松の色かな